特集「e-Japan 時代のインターネット /分散システムの構築運用技術」の編集にあたって

林 英 輔†

分散システム/インターネット運用技術（DSM）研究会が中心になって編集した本誌特集号は毎年 1 回出すことになって，今回で 3 冊目になる．今回の分も含めて，掲載された論文が対象とする研究分野の主なものは，分散システム運用管理，ネットワークの運用管理と通信技術，ネットワーク応用技術等であり，全体的には，インターネットの運用技術とそれに関連するネットワーク技術，ならびに，大学規模で実際に運用される分散型のコンピュータネットワークシステム技術の様々な研究ということになる．この特集号に対するこの 3 年間の投稿数（採択率）の推移は，1 年目，38（34%），2 年目，32（53%），今回，23（48%）である．数字のみの比較では，今回は落ち込んでいるように見えるが，掲載された論文で取り上げられた研究内容では，IX（Internet Exchange）技術の研究の論文にみるように，特徴ある論文がどの回にも見受けられること，最初の 2 回は 12 月発行であったのに対して今回が 11 月発行であったため，投稿締切前の投稿論文の最終的推敲の時間確保の余裕がなかったことも考慮すると，論文投稿に対する意欲が低下する傾向にあるとは言えず，今回投稿数が減ったことは短期的なものであると考えることができる．むしろ検討すべきは，採択率の減少であると考える．研究発表会（年 3 回開催）とシンポジウム（年 1 回開催）での研究発表の数は，そのような減少傾向は見受けられず，研究会登録者数も漸増，研究発表会の参加者数も漸増を示していて，新顔や若手の研究会活動はむしろ活発になっている．本編集委員会での査読等の検討の結果からみると，研究発表会での報告では研究テーマや内容は興味深いものの，論文としてのまとめ方が十分でない場合が見受けられ，今回の投稿論文の中にも査読段階で，数編について同様な指摘があった．かねてから，DSM 研究会でも，この論文の質向上のための対策が検討され，最近の研究発表会では，発表された研究報告の中の必要と思われる数件に対して，論文として求められる必要要件等をコメントを発表者に提示する試行が研究会幹事，プログラム委員，座長からあるグループによって行われた．また，本編集委員会においても，論文の質を高めるために，この種の問題があると考えられた投稿論文に対して，査読者ができるだけ丁寧なコメントを出すことが重要であるという指摘があった．DSM 研究会が目的とする実用になっている分散システムの運用技術の研究という分野は，研究推進の必要性が比較的最近になって認識され，それからの比較的短期期間に基礎から応用の広い専門分野の研究者，学生や技術者が本研究会に集まってきたため，研究論文や発表内容のレベルアップに対する研究会の取り組みの経験はまだ浅い．研究会として，上述のような基本的な努力を積み重ねながら，今後とも一編でも多くの質の高い原著論文の発表に力を傾けてゆきたい．

「e-Japan 時代のインターネット /分散システムの構築運用技術」特集編集委員会

- 編集長
  林 英輔（麗澤大学）
- 編集委員
  相原 玲二（広島大学）
  一井 信吾（東京大学）
  大塚 秀治（麗澤大学）
  菊池 豊（高知工科大学）
  齊藤 明紀（大阪大学）
  佐藤 文明（静岡大学）
  中川 郁夫（インテック・ネットコア）
  中村 眞（シャープ）
  中山 雅哉（東京大学）
  箱崎 勝也（電気通信大学）
  萩原 洋一（東京農工大学）
  長谷川明生（名古屋大学）
  樋地 正浩（日立東北ソフト）
  松浦 敏雄（大阪市立大学）
  宮地 利雄（NEC）
  山井 成良（岡山大学）
  山之上 卓（九州工業大学）
  渡辺 健次（佐賀大学）

† 麗澤大学